

学校図書館司書と担任教員の連携による国語科授業の充実

The Improvement of Language Arts Class by the Cooperation
of School Library Librarian and Class Teacher

須佐 宏

SUSA Hiroshi

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

米田 優介

YONEDA Yusuke

(和歌山市立四箇郷小学校教諭)

岡 恵子

OKA Keiko

(和歌山市立四箇郷小学校
図書館司書)

受理日 平成 29 年 1 月 6 日

抄録：和歌山県は、学校図書館司書の配置率が全国で最も低く、和歌山市には昨年度まで専任の学校図書館司書が配置されていなかった。そんな中、四箇郷小学校に和歌山市では初めてとなる専任の学校図書館司書が配置された。同校は、近年、国語科の授業研究に最も力を入れており、学校図書館司書との連携がうまくいけば、より充実した国語授業が展開できる。本研究は、単元を構成して実際に授業を行う学級担任と単元学習を支援する学校図書館司書の連携の在り方について研究し、その成果を検証しようとするものである。

キーワード：国語科、単元学習、学校図書館司書

1. はじめに

平成 28 年度の全国学力・学習状況調査（以下「同調査」）において、和歌山県の小学 6 年生は、国語 A の平均正答率が 70.0%であった。この結果を都道府県別に正答率の高かった順に並び替えてみると、和歌山県は 46 番目である。今年度は、熊本地震の被災があったため、46 の都道府県の結果が集計されており、46 番目というのは最下位ということになる。和歌山県では一昨年度の同調査においても小学校の国語 B で最下位となっており、このことを受けて、県レベルでの国語力向上対策として、まず、「和歌山の授業づくり基礎・基本三カ条」の周知徹底に努めてきた。これは、「めあての明示」「書く活動の位置づけ」「振り返り活動の位置づけ」の 3 つを授業者が意識して行うようにするというものである。また、文部科学省の水戸部修治教科調査官を招いた悉皆研修を行い、児童にとって魅力ある国語授業になるようにという働きかけを続けてきた。同調査における児童質問紙の結果を見てみると、「国語の授業が好き」という問いに対し、「好き」と回答している児童の割合が平成 25 年度から平成 26 年度にかけて飛躍的に上昇し、平成 25 年度からの平成 28 年度までの 4 年スパンで見ると、6.2 ポイント上昇した。また、同じく「国語の授業がよくわかる」という

問いに対しても、平成 25 年度から平成 28 年度の 4 年間で 3.7 ポイント上昇しており、授業改善が促進されてきていることがわかる。しかし、同調査の国語科の平均正答率は、平成 27 年度に多少上昇が見られたにすぎず、より一層の授業改善が必要であると言える。

2. 国語力の向上と学校図書館司書の関係

2.1. 常時開放の難しさ

和歌山県にとって、国語力の向上が、喫緊の課題であることは前述のとおりであるが、国語力の向上と深くかかわってくる学校図書館の利用状況があまり芳しくない。実際、和歌山市内の小学校で常時開放されている学校図書館は数えるほどしかなく、児童の読書や学習での活用の障壁となっている。常時開放のために地域の方にお願ひし、図書ボランティアとして入っただけの学校もあるが、学校図書館に人を常駐させることができないために常時開放をあきらめている学校が多い。

2.2. 司書教諭および学校図書館司書の配置

司書教諭の設置については、平成 9 年の学校図書館法の改正により、12 学級以上の学校については、必ず置かなければならないとされており、和歌山市にお

いても100%の発令率となっている。しかし、司書教諭は学校図書館司書教諭免許を有する教員が割り当てられる校務分掌のひとつであることから、多くの場合、学級担任業務等の傍らで担当しており、学校図書館に常駐することはできない。一方、学校図書館司書の配置については、用途が限定されない地方交付税での財政措置となっていることから、各自治体レベルでの予算化がなければ配置されることがない。平成28年10月13日に文部科学省児童生徒課より平成28年度「学校図書館の現状に関する調査結果について」が出された。それによると全国の約3分の1の都道府県で、学校図書館司書の配置が90%を越えているが、和歌山県では32.1%にとどまっており、下から7番目の配置割合である。配置の割合が90%を越えている都道府県を見てみると、石川県や富山県など、前述の全国学力・学習状況調査で正答率の高い都道府県も多い。学校図書館司書の配置によって、常時開放の促進はもちろんであるが、学校図書館司書の協力を得ながら国語授業を充実させることができれば魅力的な国語授業が増え、国語力の向上が期待できるため、和歌山市でも予算化による学校図書館司書の配置が切望されていた。

2.3. 和歌山市で初となる学校図書館司書

何とか国語力の向上につながる有効な手立てはないものかと考えていた折、今年度、和歌山市で初めてとなる学校図書館司書が、四箇郷小学校に配置されることになった。現在、小学校の国語科教科書は、5社で編纂されているが、各社とも読書への誘いともいえるページに力を入れていることは一目瞭然である。国語科の授業の中で扱う教材に関連する図書をタイミングよく紹介することで児童の読書意欲は向上し、幅広い読書経験へと導くことができる。しかし、そういった関連図書の活用や紹介については、教科書に掲載されているものの、その扱いの軽重は指導者である教員の読書経験に左右されるのが実情である。読書経験豊富な教員が指導すれば、その知識量から関連図書を活用したり紹介したりすることは比較的容易であるが、そうでない教員は、相当の労力を強いられることになるため活用に消極的になりがちである。また、経験豊富な教員であっても、経験値だけでなく、より幅広い図書資料の情報があることは選択肢の幅が広がることになるため、四箇郷小学校への学校図書館司書の配置は、国語科授業充実の可能性を期待させるものであった。

3. 四箇郷小学校の国語科研究と学校図書館の活性化

3.1. 四箇郷小学校の国語科研究

四箇郷小学校は、平成元年に和歌山市教育委員会の

教育研究指定を受け、平成4年、平成6年、平成8年、平成10年と国語科の研究発表会を行ったことのある学校であるが、近年、研究発表会は実施されておらず、校内研究授業も年間数回行われる程度であった。平成26年に校長に着任した湯川泰成は、同校の研究の停滞と若い教員が増えている現状を鑑み、国語科を中心に据えた自校の研究活動を活性化させることにより、児童の学力向上を図ろうと考えた。湯川は、現職教育の機会に外部から積極的に講師を招聘することによって若い教員の学ぶ意欲を喚起し、外部評価を仰ぎながら教員個々の授業力を伸ばすことが児童の学力向上につながると考えていた。また、現職教育主任の中村成子は、前述の県の悉皆研修で水戸部修治氏から学んだことを自ら実践する形で提案し、同校の研究を推進してきた。このことにより、平成27年度までは、年間数回しか行われることのなかった国語科の研究授業が、平成28年度には、14回（14学級ひとり1授業の実施）計画されるまでになった。

3.2. 学校図書館の活性化と国語科学習の充実

3.2.1. 学校図書館司書の配置決定

和歌山市教育委員会は、四箇郷小学校の国語科の研究機運が高まっていることを察知し、平成28年度より新たに1校設置する学校図書館司書の配置先に、学校図書館の活性化にとどまらず、国語科学習の充実が期待できる学校として四箇郷小学校を選定し、岡恵子が和歌山市初の学校図書館司書として同校に着任することになった。

3.2.2. 学校図書館の活性化

学校図書館司書として着任した岡が最初におこなったのは蔵書整理であった。昭和の頃から置かれている書籍や破損している書籍などを中心に約2,000冊の蔵書を廃棄処分にした。これにより、新刊を収納するスペースが確保されるとともに、本の表紙を見せる配架も余裕をもってできるようになった。また、新たに棚番号を明記し、絵本・読み物・社会・理科・総合・学習・その他に分類し児童が利用しやすくした。さらに、学校図書館の模様替えにも着手した。入り口近くにあっ



図1

た書架を中央に移動し、使いやすくするとともに、室内の椅子の数を減らし、代わりに絨毯スペースに座卓をおくことでくつろげるスペースを拡大した。(図1)

さらに暗く寒々しい感じのする壁に季節に応じた掲示物を貼ることで、児童がわくわくするようなスペースになるよう心掛けた。これらの取り組みによって、児童が来なくなる空間へと変えていった。(図2)



図2

図3は、6年生の児童が学校図書館の変容について書いたものである。

四箇郷小学校では、これまでもなるべく学校図書館に鍵のかかっている時間が少なくなるように努めていたが、今年度は学校図書館司書が常駐できることから、さらに拡大し、一日中開放することが可能になった。同校では、これを機会に、学校図書館の使い方についてのオリエンテーションを実施し、学校図書館利用のルールとマナーの徹底にも力を入れた。ルール・マナーとして取り上げたのは、①借りた本はもとの場所へ戻す、②走ったり、大声を出したりはしない、③借りた本は本人が返す、④困ったことがあったら図書室にいる先生にたずねる、⑤家に持ち帰ったときは、飲み物や食べ物を近くにおかないようにし、大切に読む、⑥本をかえす日を確認する、の6つである。



図3

4. 学校図書館司書と担任教員との連携

4.3.1. 双方の気遣い

学校図書館環境の整備とともに岡が当初より心掛けていたのは、国語科授業での学校図書館活用であった。前年度まで、和歌山市内の小学校で教員をしていた岡は、国語科の授業での関連図書の有効活用が国語科授業を活性化させることを熟知していたが、新任の学校であるため、それぞれの学級担任がどの程度のかかわりを必要としているのかが判断しにくい状況が続いていた。同じことは、各学級担任にも言えることであった。これまでは国語科の授業に関連する図書を自分で調べて用意していた教員の中には、何をどの程度、岡に委ねていいのかを図りかねていた。

4.3.2. 連携の促進による国語科授業の充実

互いに気遣っていた学校図書館司書と担任の関係が密になり始めたのは、今年度の研究授業が始まった6月であった。最初に研究授業をした6年生は、新規採用から2年目の田尻剛史が、星野道夫著『森へ』(6年光村図書)を扱う授業を計画していた。6年主任の寺井隆文と野尻は、この授業を通して、児童に紀行文の魅力に触れさせ、最終的には、紀行文を書かせたいと考えていた。ただ、児童が教材として紀行文を読むのはこれが初めてであり、児童には馴染みの薄い文体であった。そこで寺井と野尻は、この機会に様々な紀行文に出会わせたいと考えた。しかし、手元にはこのジャンルは少なく、ともに十分な資料や情報を持ち合わせていなかった。そこで、学校図書館司書の岡に「野口健氏や三浦雄一郎氏などの冒険家が書いた紀行文をできれば学級の児童一人一冊ずつ手にすることができるようにしたい。」という要望を伝えた。一見、無理難題とも思えるような希望であるが、現教主任の中村はそのアクションを大いに評価し、岡もまた、それに応えようと資料集めに奔走した。結果的に一人一冊には届かなかったが、それに近い数の書籍が6年生の教室に並べられることとなった。このことをきっかけに、各学年の国語科での単元開発に岡自身も積極的にかかわるようになり、両者の連携促進による国語科授業の充実が進んでいくこととなった。次項では、3年担任の米田優介が、説明的文章『すがたをかえる大豆』(国分牧衛著・光村図書3年下)を主教材として、学校図書館司書岡との連携を密にすることによって進めた国語科授業の実際について述べる。

5. 学校図書館司書との連携による国語科授業の実際

5.1. 国語科単元の実際

単元名は、「ねらえ! 説明文大賞 9歳で書く初めての『食べ物説明文』」である。本単元は、読むこと

を主な指導の目的とした「第一単元」と書くことを主な指導の目的とした「第二単元」の二部構成でおこなった。以下が指導案の詳細である。

国語科学習指導案 指導者 米田優介

- ①日時 平成28年10月19日(水)第5限
- ②学年・組 3年1組 (32人)
- ③単元名 ねえ！説明文大賞 9歳で書く初めての『食べ物説明文』
- ④教材名 すがたをかえる大豆
食べ物のみみつをおしえます
(光村図書 3年 下「あおぞら」)

⑤本単元の学習指導目標

《第一単元》中心となる語や文を捉え、段落相互の関係を考えながら、文章の内容を的確に理解することができる。(C 読むこと (1) イ)

《第二単元》自分の考えが明確になるように、段落相互の関係に注意して文章を構成することができる。(B 書くこと (1) イ)

⑥評価規準

《第一単元》

観点	評価規準
関心・意欲・態度	食べ物に関する本や資料を調べ、調べて分かったことを読みやすい文章にしたいという思いを持って読もうとしている。
読む能力	中心となる語や文を捉え、筆者の考えと事例など、段落相互の関係を考えながら読むことができる。(イ)
言語事項	読み手に分かりやすく伝えることができるように、指示語や接続語の役割を理解して読むことができる。(イ(ク))

《第二単元》

観点	評価規準
関心・意欲・態度	食べ物に関する本や資料を調べ、調べて分かったことを分かりやすく伝えたいという思いを持って書こうとしている。
書く能力	段落の役割を理解し、段落相互の関係などに注意して文章を構成することができる。(イ) 自分の文章や友達の記事の間違いを正したり、よりよい表現に書き直した

⑦授業の観点

本教材は、大豆やその加工食品について書かれたもので、子どもたちにとっても身近なものである。身近なものとは言え、大豆の加工食品は、見ただけでは原料が大豆とは分からないものも多く、子どもたちにとっても新鮮な驚きをもたらす教材である。また、「次に」「また」「さらに」「これらのほかに」という接続語を使い、読み手に大豆の“変身”を順に明かしていくことで、読み手を引きつける効果もあり、大豆そのものの形からかけはなれたものへと変身を遂げる事例の配置にも、筆者の工夫を見ることができる。さらに、他の生物の力を借りた変身や、収穫時期や育て方の違いによる他の食品への変身においても、事例の配置が工夫されている。写真と照らし合わせて読むということもでき、国語科だけではなく、他教科にもわたって必要な力を養うことが期待できる教材であるとも言える。

1学期に学習した説明的文章「言葉で遊ぼう」「こまを楽しむ」では、「段落」というものを知り、「はじ

め・なか・おわり」の文章構成における「なか」の部分に例を並べた構成を学習した。調査をし、報告文を書く「気になる記号」の学習では、リサイクルマークや道路標識などの身近にある記号について調べ、①調べたきっかけや理由 ②調べ方 ③調べて分かったこと ④感想 という構成に沿って報告する文章を書いた。その際、書いたものをペアで見合い、赤の付箋には「いいなと思ったところ・まねしたいところ」などの称賛、緑の付箋には「もっと良くなるところ」のアドバイスを書いたり、「いいな」と思ったところには文章中に赤で線を引いたりし、お互いに添削し合った。手元に戻ってきた友達からの評価をもとに清書をしたときには、友達から認めてもらえたことへの喜びや、より良い文章を書けることの喜びを感じながら鉛筆を走らせている様子を見ることができた。一方で、なかなか文書を書けない子、友達を書いた文章を見ても評価をすることが難しい子など、支援が必要な子もいる。

そこで、本単元では、「読むこと」の指導を《第一単元》(図4)、「書くこと」の指導を《第二単元》(図5)とし、「食べ物の変身を分かりやすく伝える」という言語活動を設定した。図書資料の中から調べた、自分だけが知っている食べ物の変身をうまく伝えたいという目的を明確に持つことで、《第一単元》では段落相互の関係や、指示語・接続語をより主体的に捉えることができ、《第二単元》では図書資料から集めた材料をもとに、読み手に伝えやすい文章を書くということにつなげることが期待できる。また、「気になる記号」の学習と同様に、書いたものを友達と見合い、相互評価・相互添削をすることで、意味のあるグループ学習・ペア学習にする



図4



図5 《書く単元》相互添削

とともに、共に学ぶ楽しさも味わわせたい。このように、「読むこと」と「書くこと」を組み合わせることで、それぞれの狙いをより効果的に指導していきたい。

また、子どもたちが読み手を意識して文章を書くことができるように、単元の最後に「食べ物説明文大賞」を選ぶ活動を設定した。できた説明文を無記名にした上で、学級で読み合い、ノミネート作品を3つ選ぶ。これらを、すでにこの単元の学習をしている4・5・6年生に読んでもらい、最多投票を得た最優秀作品「3年1組 食べ物説明文大賞」を決定する。同じ学校の年上の先輩に読んでもらうという相手意識を明確にすることで、書く楽しみを持ち、単元中での「書く活動」をより意味のあるものにしようと考えた。

⑧学習指導計画（全16時間）

《第一単元》	逆行読書 （米・いも・豆など）	《第二単元》
<ul style="list-style-type: none"> 身の回りの食べ物についてふり返り、教材文を読んでの初発の感想を書く。（1時間） 音読練習、難語句の確認をする。（1時間） 課題を設定し、学習の見通しを持つ。（1時間） 		<ul style="list-style-type: none"> 自分が調べてみたい食べ物取材し、どんな変身をするのか調べる。（3時間） その食べ物の変身についての初めの説明文を書く。（2時間）
<ul style="list-style-type: none"> 教材文を読み、段落相互の関係や、接続語や指示語、事例の順序など、筆者の工夫を読み取る。（2時間） 		<ul style="list-style-type: none"> 段落相互の関係・接続語や指示語・事例の順序を意識して、初めの説明文について相互添削をする。（2時間 本時1/2） 相互添削をもとに清書をする。（2時間）
<ul style="list-style-type: none"> できた説明文を読み合い、ノミネート作品を決める。（2時間+読書タイム） 最終投票をし、「3年1組 食べ物説明文大賞」を決定する。 		

5.2. 図書館司書との連携の実際

5.2.1. 図書館司書のいる学校図書館で行う国語授業

図書館司書と連携を図った本単元では、「書くこと」の指導は、通常の教室ではなく、学校図書館で行った。学校図書館で行った活動は、①図書資料を選び調べる活動、②調べた内容や、筆者国分牧衛さんの説明文、教師が自作した説明文教材をもとに説明文を書く活動、③相互添削をもとに清書をする活動、の3つである。子どもたちが苦手意識を持つ「書くこと」の活動を学校図書館で行ったのは、図書館司書による本の提示や指導がしやすく、本の活用がスムーズになると考えたからである。図書館司書が本についての的確なアドバイスをくれることは子どもたちにとって大きな安心感となった。

5.2.2. 第3時における図書館司書との連携

第3時で子供たちは、みりんやおかきが何でできているか予想した。そこでは、大豆より身近である米からできているということに驚く様子が見られた。そこで、他にどんな変身食品があるかを考え、大豆や米の他に、とうもろこし・麦・魚・牛乳・肉・たまご・トマト・カカオなどの変身食品を出させ、その変身を国

分さんみたいな説明文にしようということを伝えた。子どもたちの表情の中には、「やってみよう」というワクワク感と、「できるのかな」という不安の両方が見てとれた。そこで、学校司書から、学校図書館にもたくさん変身の本があるという話をしてもらい、子どもたちの「早く本を見てみたい」という気持ちを引き出そうとした。

5.2.3. 第4時から第6時における図書館司書との連携

書く指導に移った第4時には学校図書館へ行き、事前に図書館司書に依頼していた変身食品の本を紹介してもらった。図書館司書が、大学との研究協力費で購入したり、市民図書館や県立図書館から借りたりしてそろえてくれた変身食品の本は、7食品35冊に及んだ。これらの本を見た子どもたちは、自分たちの予想した変身食品は本当かどうかを確かめようと、本へと一直線に向かっていった。本の中に変身を見つけた時の満足そうな顔からは、この単元に対する子供たちの意欲が窺えた。第4時から第6時でこれらの図書資料から自分の選んだ食品について調べたのだが、図書館司書の的確な指導や助言があるため、子どもたちは積極的に調べ、黙々とワークシートに食品の変身を書き留めていた。

5.2.4. 第7時・第8時における学校図書館司書との連携

第7時と第8時では、変身食品について調べたワークシートをもとに、初めの「食べ物説明文」を書いた。説明文を書く上では、教材「すがたをかえる大豆」、教科書の例文「いろいろなすがたになる米」、教師自身が書いた「食卓のヒーローいもの変身」を参考にさせた。ここでも図書館司書の指導補助があったため、クラス全員が、調べたワークシートをもとに説明文を書くことができた。

5.2.5. 清書時における学校図書館司書との連携

相互添削の後の清書は再び学校図書館で行った。友達からの色ペンでのアドバイスや自分の訂正メモをもとに、二度目の説明文を書いた。さらに調べた方が良かったと思った児童は本を手に取り、必然性のある調べ学習を行っていた。図書館司書もはじめの説明文を書いている子どもの様子をもとに必要資料を紹介したり、児童の求めに応じて指導に入ったりした。児童はそれぞれの説明文の改良に取り組み、どの子も納得のいく説明文を書き上げることができた。

6. 実践を振り返って

学校図書館司書と担任教員との連携による国語科授業の充実について研究を進めてきたが、今回の実践で

は、両者の連携として5つのことを実践することができた。1つ目は、事前のアンケート調査による児童の実態の共有である。学級担任として、これから始めようとする学習に対するレディネスをチェックすることはある。その情報を学校図書館司書が共有することで、より児童に寄り添ったかかわりをするのが可能になった。2つ目は、学校図書館で学習をするまでの学習の流れを共有することである。実際、岡は、前時までの国語授業を見学を訪れ、授業者の意図を把握するとともに、児童の学習の様子を実際に観察することで支援の在り方を想定することができた。3つ目は、調べ学習に必要な資料の準備である。事前の授業を参観することで、授業者の意図がわかるため、授業者の意図をくんだ資料選びができるようになった。4つ目は、学校図書館で行う授業の中でのサポートである。前時までの授業の流れの中で行っている児童の活動に対し、ティームティーチングのT2のようなかかわりも可能であった。5つ目は、単元終了後に行った学びのアンケートの集計サポートである。児童の授業に深くかかわることで、児童の変容を見極めることは、学校図書館司書としての関わり方の評価を得ることにもなった。実際、今回の単元学習前に行ったアンケート調査では、「国語の勉強が好きか」という項目（図6）において、「好き」と回答したのは9人で全体の約28%、「どちらかと言えば好き」と回答したのは11人で約34%、肯定的な回答した児童の割合は、約62%だった。それに対し、単元学習後に行ったアンケート調査では、「好き」が16人で約50%、「どちらかと言

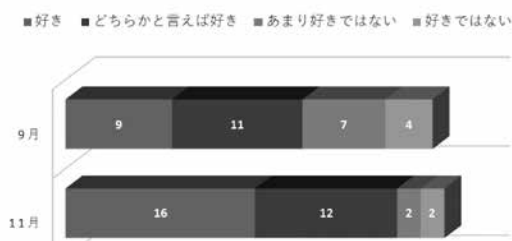


図6 国語の勉強が好き

えば好き」が12人で約37%と、肯定的な回答をした児童の割合が約87%となり、約25ポイントの上昇が見られた。また、「国語の授業がよくわかる」の項目（図7）においても、単元前の肯定的な回答の割合が25人約80%だったのに対し、単元後は28人約86%と向上が見られた。これらのアンケート結果から、学校図書館司書と担任が密に連携して行った国語科学習のスタイルや、書く活動を学校図書館で行うとした単元構成が効果的であったと言えるのではないだろうか。

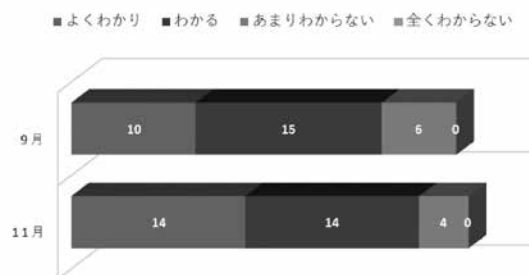


図7 国語の授業がよくわかる

7. おわりに（今後の展望）

同校の取り組みはまだ始まったばかりであるが、確かな一歩を踏み出したと言える。今後は、学校図書館司書と学級担任の連携の在り方の多様性を探るとともに、アンケート調査に見られた情意面の向上と合わせて、国語力の向上がどの程度図られているかの検証を進めていきたいと考えている。

【参考文献】

- ・ 食べものはかせになろう！〇〇からつくる食べ物（ポプラ社）
②米・麦、③牛乳・肉・たまご、④魚・海そう
- ・ すがたをかえる食べ物 〇〇がへんしん！（学研）②米、③麦、
④牛乳、⑤とうもろこし、⑥いも、⑦魚
- ・ 身近な食べ物のひみつ すがたをかえる〇〇（学研）①米・麦、
⑤魚・海そう、⑦牛乳・たまご
- ・ くらべてわかる食品図鑑（大月書店）②肉と乳製品、③米と
こく類、④魚と海そう